

子どもの音の描画表現と読み取りの研究

奥 美佐子

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: m-oku@shoin.ac.jp

Children's expression of sound through drawing, and interpretation of these drawings

OKU Misako

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本研究は、子どもが音を描いた絵を別の子どもがどのように読み取るかについて、実践を通じて明らかにし、表現者の感覚と鑑賞者の感覚の間に何らかの交感の要因を見出そうとするものである。単音を色彩に変換する実践では低音部と高音部に共通した色彩選択が見られた。擬音の描画表現では線の形状から音を読み取る傾向が見られた。単音を色に変換する実践と、擬音を描いた絵を読み取る実践を実施し検討した結果、単音の変換における実践では高音部や低音部で共通した色彩の選択が出現し、擬音を表現した描画の読み取りにおいては、線の形状や形態が読み取る音のイメージに繋がることになった。

This study aimed to identify through actual testing how a child reads another child's drawn representation of sound, and also to find a sympathetic factor between the senses of the child expressing the sound in the art and those of the child interpreting the art. In an exercise of converting single-tone sounds to color, common color selections were observed to represent low-pitch and high-pitched sounds. When interpreting drawn onomatopoeic sounds, children tended use the shape of the lines to help imagine the sound.

キーワード：子どもの描画、音を描く、絵を読む、表現と鑑賞

Keywords: Children's drawing, Drawing sound, Interpreting drawings, Expression and interpretation

I. はじめに

芸術表現において表現者が伝えたいことと鑑賞者が感受し理解することは必ずしも一致しているとは言えない。表現者を発信源と考えるなら、1つの発信源から送られた表現には無数の受信者がいて、受信者は彼の感性や能力によって表現を受け止め理解する訳であるから、芸術表現の解釈は無限にあるとあってよい。彫刻家のイサム・ノグチ（1904年～1988年）は彼の石の彫刻ブラック・スライド・マントラ（1988年、札幌大通公園に設置）において、「この彫刻は子供たちのお尻で磨かれて完成する」と、表現の完成を受信者である鑑賞者を表現する側を巻き込んだ。彼の言の通り、晴れた日には多くの子どもたちがこの滑り台で遊ぶ姿が見られる。鑑賞者を永遠の制作プロセスに巻き込んでもなお伝えたいものと伝わるものは完全に一致することは少ない。筆者はここで表現者の意図と鑑賞者の読み取りの完全一致を求めているのではない。芸術表現は表現者の意図を超えて多様な影響をもたらすものである。

他方、メディアとしての美術という観点で美術表現を見てみると、美術表現はコミュニケーションツールとしての多様な要素で成立していることがわかる。芸術表現を通して「コミュニケーション」の成立を期待するならば、そこに何らかの双方向的な交感ツールが存在するだろうと考えるからである。拙稿「色と音をどのように表現するか」¹⁾の調査I、IIにおいて、色彩と音響の関係に法則を見つけ表現の方法を構築したW・カンディンスキーの偉業に至るには道は遠いが、色と音の関連、例えば単色と単音の間の表現と聞き取りにおいて、或は音を描画にした表現者の感覚と描画から音を聞き取ろうとする鑑賞者の感覚の間に、わずかではあるが交感の型があることがわかった。それらは感覚的で単純なイメージ変換的なレベルではあるが、意図的に美術表現と音楽表現に使用することでノンバーバルなある種のコミュニケーションが成立するのではないかという期待をもつことができた。

これらの調査は神戸松蔭女子学院大学に在籍する学生を対象にしたものであった。造形表現は言葉にならないものを表現できる表現方法の一つである。語彙を多く持たない時期の子どもたちにとって、描画はノンバーバルなコミュニケーションツールとしての意味があるといえる。本研究は、子どもが音を描いた絵を別の子どもがどのように読み取るかについて、実践を通じて明らかにし、表現者の感覚と鑑賞者の感覚の間に何らかの交感の要因を見出そうとするものである。交換の要因が色彩や線の形状、形などの造形要素であり、これらがメディアとしての役割を果たしていることを実証することを目的とする。²⁾

II. 研究の方法

調査は「色と音をどのように表現するか」で実施した調査I、IIと同様の調査内容を保持しつつ、幼児を対象として実施可能な方法に調整したもので、調査1及び調査2を実施した。調査1、2の結果を検討し、表現者の感覚と描画から音を聞き取ろうとする鑑賞者の感覚の間に何らかの交感の型を見出す。最後に「色と音をどのように表現するか」における学生を対象とした調査I、IIと対照し、共通項を探る。

調査1、2の概要は以下のとおりである。

1. 調査1【単音と単色の関係】

目 的：ピアノの単音からイメージする単色を調査し、単音と単色の関係を検討することにより、幼児がイメージする音と色の共通性を確認する。

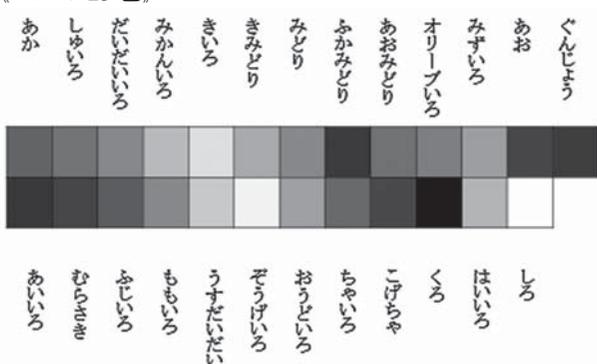
期 日：2011年10月

対 象：大阪市内Y幼稚園 5歳児35名（男児18名、女児17名）

方 法：学生用に作成した調査の手続きを5歳児向きに作成し直し、対面式による個別の聴き取りを行った。調査の手続きと幼児を対象とした配慮点を以下に示す。

- 1) 学生を対象とした調査では、「音→色」と「色→音」の双方から実施したが、5歳児を対象とした本調査では、比較的イメージしやすい「音→色」における調査のみを実施する。
- 2) 音はイ音から2点ト音まで半音を省いた14音とする。学生にはイ音から2点ト音を用いたが、幼児には日常使用する「ど・れ・み（ら～そ）」で示し、電子ピアノの音によって提示する。
- 3) 色は調査対象児が日常使用しているパスを準備し、25色のパスの実物を提示する。学生はこれに金・銀を含んだパスを使用した。

《パスの25色》



- 4) 35名の幼児を個別に調査する。担任教諭が電子ピアノで音を弾き、幼児がその音からイメージした色のパスを指差して示すことを、14音階分繰り返す。
- 5) 結果を調査用紙に記入し、担任教諭と筆者で結果を確認し分析する。

幼児用調査票

整理番号()
男・女
生年月日
音楽(好き・苦手)

音階	ら	し	ど	れ	み	ふ	そ	ら	し	ど	れ	み	ふ	そ
色														

図1 幼児用調査票

2. 調査2【音の表現と読み取りの関係】

調査2では、まず幼児が擬音を抽象的な形態を使用して表現可能か、ということを確認する必要があるため、以下の予備調査を行うこととした。

《予備調査》

目的：予備調査は、4, 5歳の幼児が音を抽象的な形態だけで表現できるかということを確認することを目的とする。

期日：2014年5月30日（4歳児）、6月6日（5歳児）

対象：京都市T保育園4歳児 17名、5歳児21名

実践方法：元永定正作の絵本『がちゃがちゃ どんどん』³⁾から、絵本に描かれた‘がちゃがちゃ’と‘どんどん’を表した抽象形態を使って、音の大小やニュアンスをイメージして自分の‘がちゃがちゃ’と‘どんどん’を描く。描画材はパスと絵の具を使用した。

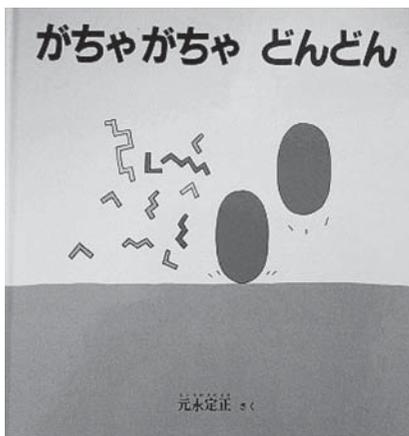


図2 『がちゃがちゃ どんどん』

《音の表現と読み取りの実践》

目的：幼児が音（擬音）を点や線、抽象形態で描いた描画を、別の幼児がどのように「音」を読み取るかについて実践し、その効果について検討することを目的とする。

期日：2014年8月26日

対象：京都市T保育園 5歳児21名

part1 いちよう組12名（男児6名、女児6名）

part2 ぎんなん組9名（男児4名、女児5名）

実践方法：音の表現と読み取りの交感を目的とした実践にあたり、実践をpart1（表現）とpart2（読み取り）に分けて行った。part1, part2の手続きは以下のとおりである。また、調査Ⅱでは表現者が身近な音を擬音で示し、その音を抽象形態を用いて描画表現したが、調査2では対象が幼児であることから音の選択に別の方法を使った。

【part1】音を描画で表現する

1) 描くための音の決定：予備調査に使用した絵本『がちゃがちゃ どんどん』から、以下の6つの音を選択しておく。

①ざあー ざあー、②ぼん ぼん、③ぱちん、④びー、⑤ぶわあ、⑥じゃら じゃら

2) パス16色、四つ切白画用紙を使用する。

3) 活動計画は以下の通り。

i いちよう組12名の幼児に①～⑥の音を示す。この時、音をひらがなで書いたカードを1

枚ずつ見せて、言葉で擬音を添える

- ii 1つの音を2人ずつ選択して描くことを伝え、①から順に描きたい幼児を募る。希望者が複数いた場合はジャンケンをして別の音の選択に回る。
- iii 2人ずつ並列に並ぶ隊形で座り、描く。線や色で描くこと（具体的には、がちゃがちゃどんだんを描いた時のような方法で描く）を伝える。
- iv 完成したら表現した音について1人1人に担任の保育者ととも話を聞き、実践 part1 を終える。
- v いちよう組が描いた音の表現を、描いた隊形のまま置いておく。

【part2】描画表現から音を読み取る

- 1) ぎんなん組の幼児を1人ずつ呼び、1次・2次の2種類の方法で音を聴くように促す。
 - 1次 ①から順番に描画を見てどんな音が聴こえるかを聞く。
 - 2次 ①～⑥の音を実践者が擬音で示し、どの描画に該当するかを幼児に聞く。
- 2) 1次が終了してから、2次があることを知らせ、実施する。
- 3) わからない場合は「わからない」と答えるように伝えておく。
- 4) 筆者が子どもと応答し、発語とエピソードは担任保育士が記録し、検討する。

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査1【単音と単色の関係】

単音からイメージする単色について、以下の結果になった。

- 1) 選択した色の分布から
 - i. イ音～1点ハ音はあかからオリーブいろまでの選択は少なく、みずいろからしろまでの選択が多い。比較的低い音域は寒色系の青から紫、茶の各系統、無彩色を選択した。
 - ii. 1点ニ音～2点ロ音まではしゅいろからぞうげいろまでの選択が多く、あか、おうどいろからしろまでが少ない。中音域では朱や橙系の暖色系から緑系統が選択された。青系、紫系の選択は i と重なる。
 - iii. 2点ハ音～2点ト音まではあかからみどりとうすだいだいからしろへの2箇所を選択が分かれた。高音域では赤から黄への暖色・明色と、茶系から無彩色と選択が分かれた。

表1 単音からイメージした単色

色名/音階	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
あか	1	1	1	2	1	2	1	2	0	4	1	1	2	1
しゅいろ	0	1	0	1	2	2	0	0	3	1	3	0	4	1
だいだい	0	0	1	0	1	2	3	1	0	0	1	1	1	1
みかんいろ	0	1	1	1	6	3	0	1	1	3	3	3	1	0
きいろ	0	1	1	4	2	2	0	3	3	1	4	5	2	7
きみどり	1	1	0	1	0	3	2	0	4	1	1	2	3	1
みどり	1	0	1	3	1	0	3	1	0	1	3	0	2	1
ふかみどり	0	0	1	1	3	1	1	2	0	2	0	0	2	0
あおみどり	0	2	1	2	1	0	1	3	2	1	0	1	0	2
オリーブいろ	1	0	2	1	2	1	0	2	4	2	0	1	0	0
みずいろ	0	2	6	2	1	2	1	2	4	1	2	3	1	0
あお	4	2	2	2	3	1	3	4	3	0	1	3	1	0
ぐんじょう	3	1	1	2	0	1	2	1	1	1	1	0	2	0
あいいろ	1	1	0	3	1	1	0	4	2	0	0	0	1	3
むらさき	6	2	5	0	2	0	1	1	0	2	3	1	0	2
ふじいろ	1	1	1	4	3	6	2	1	1	1	1	0	0	3
ももいろ	0	6	0	1	3	1	3	0	1	2	0	2	2	0
うすだいだい	3	1	1	1	0	1	3	0	1	1	1	2	3	0
ぞうげいろ	0	1	0	2	1	1	3	2	1	2	4	1	2	3
おうどいろ	0	3	3	0	0	1	2	2	1	1	1	4	0	0
ちやいろ	2	3	1	0	0	2	2	0	0	1	0	2	1	0
こげちゃ	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
くる	9	1	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0
はいいろ	0	1	1	0	1	0	0	1	2	0	2	1	3	2
しろ	2	3	0	2	1	1	2	2	1	5	2	3	1	8

5~9pt

10~19pt

20pt以上

表2 選択数が多い色 (5歳児) *ゴシック太字は選択数が多い

低音域	中音域	高音域
みずいろ・あお・むらさき・ももいろ・くる	あか・みかんいろ・きいろ・きみどり・オリーブいろ・みずいろ・あお・ふじいろ・ぞうげいろ・しろ	しゅいろ・きいろ・おうどいろ・しろ

2) 選択数が多い色から

表2に低音域、中音域、高音域で選択された数が多い音を示した。低音域では、紫、黒などの濃色を選び、中音域では赤系～紫系まで幼児の選択の幅が幅広く中でもみかん色、ふじ色の中間色の選択が多い。高音域では白、黄色の高明度の色を選択した。低音域は濃色で明度は低く、中音域では中間色、高音域は高明度の色の選択が多いと言える。

選択した色の分布からと選択数が多い色から検討した結果、音域と色の間には関連があるのではないかと考えられる。

2. 調査2【音の表現と読み取りの関係】

1) 予備調査の結果

擬音を抽象的な色と形で表す試行において、以下の表現が出現した。対象とした4, 5歳児では、擬音を抽象的な形態で表現することが可能であることを確認した。



図3 4、5歳児 『がちゃがちゃ どんどん』

2) 音の表現と読み取りの実践の結果

【part1】音を描画で表現する

i. 導入時と描画プロセスでの子どもの反応

導入時の擬音①～⑥への反応は、

①ざあー ざあー「雨、手で雨降りの様子を表現する」、②ぼん ぼん「ボール」、③ぱちん「拍手、手をたたく」、④ピー「機関車の音、ピーぽーピーぽー」、⑤ぶわあ「怪獣、恐竜、ドラゴンの火」、⑥じゃら じゃら「石、マラカス」というものであった。主に具体的なイメージを描く、身体的に反応する、の2種に分かれた。

描画のプロセスでは、

①ざあー ざあー では、「傘を描いてもいいか」、⑤ぶわあでは「怪獣や恐竜が火を噴いている様子を描きたい」という発問があった。双方ともに抽象的な表現より、擬音からイメージした具体的なものや状況を表現したいという発問であった。

ii. 出現した子どもの表現

各2名の幼児が①～⑥の擬音を描画表現した。①～⑥の擬音の表現者である幼児と表現については、それぞれ①-1、①-2～⑥-1、⑥-2と表す。①～⑥の表現は図6-1～図6-6のとおりである。



図4 ①-1

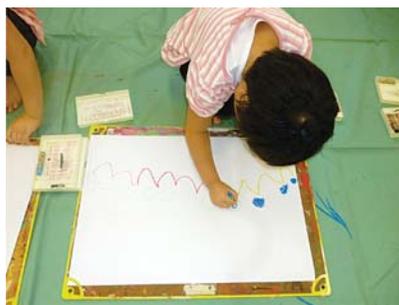
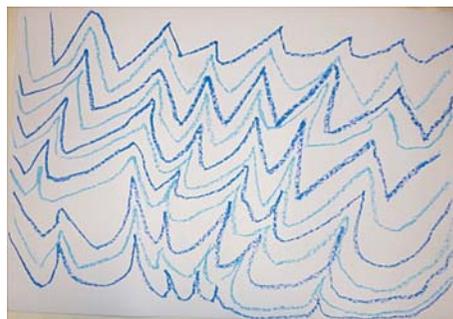


図5 ②-1



①-1



①-2

図6-1 ざあー ざあー

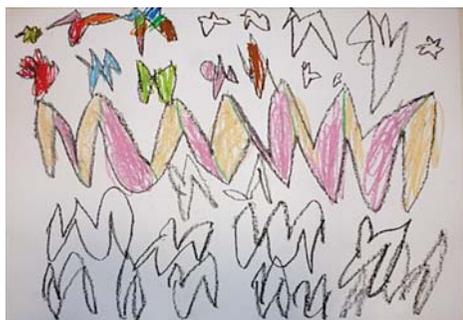


②-1



②-2

図6-2 ぽん ぽん

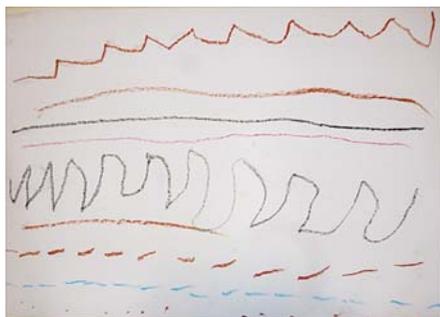


③-1



③-2

図6-3 ぱちん

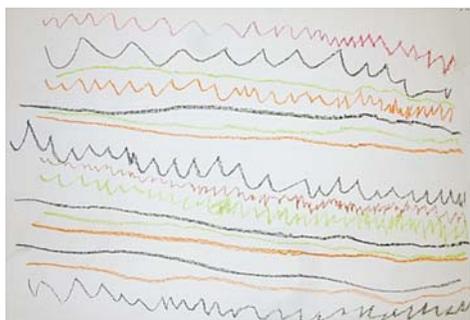


④-1

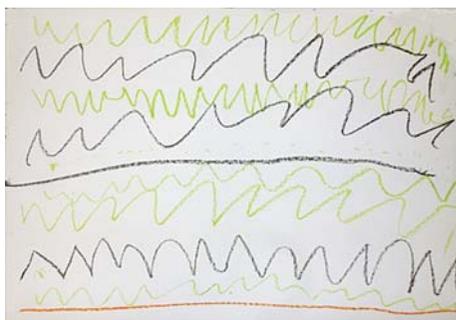


④-2

図6-4 びー



⑤-1

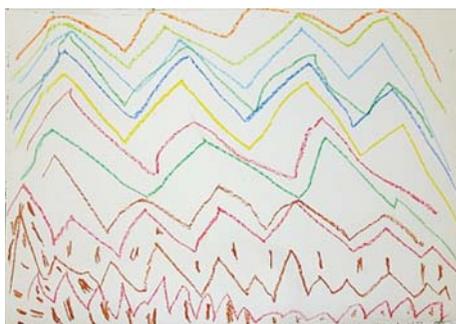


⑤-2

図6-5 ぶわあ



⑥-1



⑥-2

図6-6 じゃら じゃら

iii. 表現の要素について

幼児は、点・線・面と抽象的な形態を使用して音を描いた。①、④については具体的な表現を望んだ幼児がいたが、実践者との応答の結果自己調整して具象形は使用せずに表現を進めた。色彩については自由選択できるようにパスを使ったが、①-1, 2 ざあー ざあー→雨→水色と青で線表現した。これに関しては色と線による表現で、具体的な表現と区別がつきにくい。他の表現については、特に擬音と色が特徴的に結びついたとは判断できかねるものである。

表3 使用した色

選択した音	作品番号	使用した色数	使用したパスの色
①	①-1	2	青・水色
	①-2	2	青・水色
②	②-1	8	水色・赤・ピンク・黄色・橙・緑・黄緑・青
	②-2	2	水色・緑
③	③-1	11	黒・茶色・水色・青・赤・ピンク・橙・緑・黄緑・黄色・うす橙
	③-2	11	黒・茶色・水色・青・赤・ピンク・橙・緑・黄緑・黄色・うす橙
④	④-1	4	黒・茶色・赤・水
	④-2	11	黒・茶色・赤・ピンク・水色・青・橙・緑・黄緑・黄色・うす橙
⑤	⑤-1	5	黒・茶色・橙・赤・黄緑
	⑤-2	2	黒・黄緑・橙
⑥	⑥-1	10	青・水色・緑・黄緑・橙・ピンク・黄色・赤・黒・茶色
	⑥-2	8	赤・茶色・緑・黄緑・青・水色・橙・黄色

【part2】 描画表現から音を読み取る

i. 鑑賞者として読み取る

以下、1次、2次の読み取りを行った結果を表4に示した。

1次 自由回答：①から順番に描画を見てどんな音が聞こえるかを聞く。

2次 選択回答：①～⑥の音を実践者が擬音で示し、どの描画に該当するかを幼児に聞く。

自由回答は幼児が描画から読み取って答えた言葉を記入し、選択回答では①～⑥の番号を記入した。番号に付した下線は、表現者が描画表現した音と同じ音を鑑賞者が読み取ったものである。

表 4 描画表現の読み取りの結果 (1次・2次)

読取た音	作品番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
①ぼあー ざあー	①-1	ぼあーざあー ①	ぼあーざあー ①	わからない ①	わからない ①	わからない ①	わからない ①	ぼあーざあー ①	ボトボト ①	ぼあーざあー ①
	①-2	ギザギザ	わからない ①	わからない ①	ギザギザ	わからない ①	わからない ①	わからない ①	ぼあー ①	わからない ①
②ばん ばん	②-1	わからない	わからない ①	わからない ①	ナミナミ	わからない ①	わからない ①	わからない ①	わからない ①	わからない ①
	②-2	ブンブン ①	モクモク ①	わからない ①	わからない ①	ベタベタ ①	わからない ①	わからない ①	わからない ①	マルマル ①
③はちん	③-1	ギザギザ	わからない ①	わからない ①	わからない ①	ガチャガチャ	グクグク	キウキウ	ギザギザ	わからない ①
	③-2	ギザギザ ①	わからない ①	わからない ①	ボトボト ①	ガチャガチャ ①	グクグク ①	ムクムク ①	グザグザ ①	わからない ①
④びー	④-1	わからない	ぬの音 ヒュー	ギザギザ	ビューンビューン①	トントン	わからない	わからない	①ビュー	ギザギザ
	④-2	わからない	わからない ①	ゴゴゴ	パチャパチャ	ガシャガシャ	わからない	スーッ	ぼあーざあー	モクモク
⑤ぶわ	⑤-1	ギザギザ ①	わからない ①	ギザギザ ①	ギザギザ	カクカク ①	グクグク ①	ギザギザ	バン	ギザギザ
	⑤-2	ギザギザ	わからない ①	ゴゴゴ	わからない ①	カクカク	グクグク	わからない	わからない ①	ギザギザ
⑥じら じら	⑥-1	ギザギザ ①	わからない ①	わからない ①	ばちんばちん	ガチャガチャドンドン	はねみだりに見え る ①	キウキウ	バキバキ ①	わからない ①
	⑥-2	ギザギザ	わからない ①	ギザギザ	じらじら ①	カクカク	三島みらいでザワザ ワしている ①	ギザギザ	トゲトゲみだりーぼ あーざあー	ギザギザ

ii. 読み取りの検討

自由回答の読み取りは以下の4つに分類でき、それぞれの割合を以下に示した。

- A. 「音」を読み取る (24.1%)
- B. 「線の形状や形態」を読む (24.1%)
- C. 「状態」を読み取る (11.1%)
- D. わからない (40.7%)

「わからない」が回答の最も多くを占め、擬音で答えた幼児とギザギザやカクカク、まるまるなど表現された線や形態をそのまま、またはリボンみたいに見えるなど見立てて答える幼児が同率あった。音を描いたことを説明した上での回答であったが、幼児は描かれた抽象形態から音を聴く以外にも視覚から理解した造形要素をダイレクトに言語化したり、ムクムクやスーッなど状態をイメージしたりすることがわかった。

回答の個人差に注目すると、b, cの幼児の回答に「わからない」が多く、それぞれ9/12, 7/12である。「わからない」が3/12であるa, e, hをみると、a, eについては「わからない」以外の回答には同じ音の回答が繰り返されている。hは「わからない」以外はすべて違う回答をしており、課題解釈ができ、語彙が豊かであることがわかる。また、「わからない」の出現を見ると課題の前半より後半のほうが少なくなっている子どもが多く、課題の習熟度によって回答が異なると考えられる。

「音」を読み取った26例の回答の中で、④ピーという音の描画からの読み取りに「ヒュー」「ピューン ピューン」「ピュー」という回答が3例あった。濁音、半濁音の音の描画の読み取りに、同じ音で表されていなくても同じ五十音や濁音、半濁音の読み取りが出現することが拙稿「音と色をどのように表現するか」で明らかにしていることから、対象者の年齢が下がっても同傾向の回答が出ることが確認できた。加えて表現者が描画表現した音と同じ音を鑑賞者が読み取ったものは26例中7例で、①-1, 2で7例、⑥-2で1例あった。的中率6.5%である。

次に選択回答による読み取りの結果を以下に記す。自由回答で「わからない」と答えた子どもが音の選択肢を示されることで描画と音を繋ぐ意識を強く持つことを意図して採った方法である。「わからない」の回答数が多いb, cの幼児は選択回答では0となった。iが「わからない」が3残ったが、自由回答よりは減少しており、的中した回答数も1から3へ増加していて、全く選択肢がないより聞くことができたのではないかと考えられる。選択回答により、dはすべてにおいて的中した。表現の受け止め方は個々に違って当然であり、多様性こそ創造へ繋がるものであると考えるが、調査の中で表現者が描画表現した音と同じ音を鑑賞者が読み取ったものは、表現者の表現意図の伝達が行われたものとしてここでは「的中」と表示していることを断っておく。(表5, 6)

表5 「わからない」回答の比較

幼児の記号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
自由回答	3	9	7	3	3	5	5	3	5
選択回答	0	0	0	0	0	0	0	0	3

表6 的中した回答数

幼児の記号	a	b	c	d	e	f	g	h	i
自由回答	1	1	0	1	0	1	1	1	1
選択回答	3	2	3	6	3	2	5	3	3

IV. 表現の交感に型はあるか

音から色をイメージして音と色の交感を目論んだ調査1からは、高音域では白、黄色の高明度の色を選択した。低音域は濃色で明度は低く、中音域では中間色、高音域は高明度の色の選択が多いことから、音域と色の間には関連があると思われ、色と音の共有感覚のがあると考えられる。1対1ではなく、広い色の領域と音域ではあるが表現の交感が可能であると考えられる。

音の描画表現とその読み取りを調査した調査2では、表現者は直感的に線や形に変換して表現する事例、音から具体的なものや事象をイメージしてそれを線や形で表現しようとする事例があることがわかった。表現素材としての造形要素の選択については、表現する側は色彩の選択よりも線や形に音の意味を持たせた。

読み取りもまた色彩よりも線や形、構成からイメージを結んだと考えられる。幼児の描画表現ではメディアとしての働きは線や形が表現要素となり、読み取りの要素となった。色彩は①以外は描画表現として重要な造形要素として選んでいない。本実践では線と形がメディアとして主な働きをしていることが確認できた。幼児による音の描画表現は鑑賞者としての他の幼児には音の表現として伝わる可能性が24.1%で、音の表現意図が伝わる確率が6.5%であった。音の表現として読み取らなかった鑑賞者は造形言語を視覚的に解釈したり、状態をイメージしたりする描画の読み取りをしていたことがわかった。鑑賞者は自分の感性で享受することから、伝達力はあるが確かなものであるとは言えないだろう。造形要素を色に限らずに音を描画表現した場合、造形要素としての線が読み取る場合のメディアとしての力を持つことも分かった。音を描画表現し、それを読み取る試みからは、わずかではあるが伝達力の存在と表現の読み取りの多様性が確認できた。

西欧の絵画におけるアトリビュートや表現に隠されたメタファーは、約束事を共有するこ

とを前提とした理解を提供するが、ルール化されていない感覚の共有を目指した場合においても造形表現は言葉にならないものを表現できる表現方法の一つである。語彙を多く持たない時期の子どもたちにとって、描画はノンバーバルなコミュニケーションツールとしての意味がある。子どもの描画表現において、表現者の感覚と描画から音を聞き取ろうとする鑑賞者の感覚の間に何らかの交感の要因を見出すならば、単音の変換における高音部や低音部と色彩の共有感覚や、擬音の表現とその読み取りにおける線の形状や形態を通じて具体的な音や擬音をイメージすることが可能な要因である造形要素は、メディアとして働いたと考えられる。子どもの描画表現において線・形・色彩はノンバーバルなコミュニケーションツールとしての意味を持つのではないだろうか。

注および参考文献

- 1) 奥美佐子著「色と音をどのように表現するか」神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇 NO.3, 2013
 - 2) 奥美佐子、奥村正子「色を聴く・音を見る 3 - 幼児が音からイメージする色を探る -」2013年5月、第66回日本保育学会にて口頭発表、第66回日本保育学会研究発表要旨集に収録
奥美佐子「色を聴く・音を見る 4 - 幼児による音に表現と読み取りの交感 -」2014年5月、第67回日本保育学会にて口頭発表、第67回日本保育学会研究発表要旨集に収録
- ・小松左京、高階秀爾著『絵の言葉』青土社刊 2009年刊
 - ・木村三郎著『名画を読み解くアトリビュート』淡交社 2006年刊

(受付日: 2015. 12. 9)

